

令和七年度 一般入学試験問題

国語

◎ 指示があるまで開かないこと

北海道社会事業協会 帯広看護専門学校





問題一 次の文章を読んで、設問に答えよ。

わたしたちは裸眼で世界を見ているつもりになっているが、じつはいつもあるフレームワーク(a)のなかで見ている。言葉で世界を分節し、一定の概念の枠に沿って分節されたものを関係づけつつ、ものごとを経験し、思考している。この眼鏡はたえず調整され、ときに別の眼鏡に取り換えられることはあっても、眼鏡というものを外すことはできない。眼鏡を外しては見られないのであるから、その眼鏡の精度を、それを通して見られるもの（世界）を① **さじゆん** にして測ることはできない。眼鏡をはめたままその精度を測るほかないのである。

精度を高めるためには、それを通して見える世界にたえず問いかけてゆかねばならない。そしてそれが正しく見えているのか、問いたさなければならぬ。どのような問いを世界に向けるか、どのような問いをおのれに対して立てるかということが、世界の探究とおのれの視線の検証とには死活的に重要である。

**A**、どこに目をつけたらよいのか。世界のその見えが歪んでいるところ、ぶれているところ、他の見えと整合しないところ、人によって異なってみえるところ、均衡を失って崩れかけているところ。あるいは矛盾が② **露呈** するところ、論理が③ **破綻** するところ、どうにも説明がつかないところ。事象と理解のフレームワークとが軋みだしているところ。さらには事象の構造が想像もつかないところにずれだしている気配、思考の気流の変化……。なにか途轍とてつもない地殻変動が起こりそうな気配を取り逃さないこと。そう、そのためにうまくあたりをつけること、勘所を押さえること、ちよつとしたサインを見逃さないこと、好機を逃さないこと、全体に目を漂わせること。**B**、感度のよいアンテナを張りめぐらせて、全体に目をくばり、世界のなかの、微細ではあるが経験を地盤ぢばんと揺るがそうと息をひそめているものへの感度を高めること、そしてそこから問うべき問いを見つめること、そういうセンスを身につけなければ事は始まらない。

「現場」の、一点からは見通しえない動的な全体にたえずまなざしを漂わせていること、これは台所に立ったときの感覚に似ている。ありあわせの材料で献立を考えること、料理が冷めないようにどう工夫するか、片づけを調理のあいだにどううまく嵌めは込むか、洗い物はいつするか、食器をどう収納するか、それに要不要の判断、材料費のやりくり、そしてその間も家族の様子をそれとなく窺うかがうこと。そういうふうにもわりに眼をくばり、勘所を外すことなく、不定型にうごめく全体をケアしつづけること、そしてそこから考えるべきこと、直すべきことを取り出すこと。哲学でいえば、フィールドワークのさなかで問題を析出すること、そしてそれに応じうる概念を創造(1)すること。哲学は台所仕事に通じている。

こうしたまなざしのくばり方を、**(b)**「哲学のセンス」と呼んでみたい。「現場」に「哲学を発見する」こうしたセンス、なんなら視力ないし技法と呼んでもいいが、それを**C**、日本のこれまでの哲学教育は開発しようとはしてこなかった。いうまでもなく、こういうセンスを磨いておかなければ、中等教育、なかでも高等学校での公民科の「倫理」や「現代社会」の授業で、**(2)**「具体的な事例に当たって「考える練習をさせる」ことなど、できない④ **そうだん**」であるのに、である。そしてこの背景には、日本の哲学研究が中等教育での哲学教育の必要を課題としてまともに受けとめてこなかったということがある。

哲学にかぎらず、一般に科学研究に⑤ **じゅうじ** しているときに、研究者はたしかに未開拓の問題領域に敏感であるにしても、その未知のことがらは、既定の理論の枠組のなかで未知であるにすぎない。科学は仮説を立て、観察と検証を積み重ねるなかで進化してゆくのだが、そうしたなかでこれまでの理論の枠組ではどうしても説明できない現象がいくつか現われてくることがある。それらを説明するためには、これまで研究を主導してきた概念のフレームワークをぐっと拡げるか、それでも無理ならそのフレームワークを根本から組み換える必要がある。じつさい、これまでの科学の歴史を見ればわかるように、歴史に残る発見というものは、それまでの研究が立脚してきた**I** **(1)** **を**しばしば根底から揺るがし、組み換えるようなものであった。そうだとすると、科学研究においては、既存の枠組のなかでは説明できない現象、既成の枠組のなかではあまり価値を認められていない現象、いやそもそも

も問題としてすら意識されない現象に対する II を十分にもっているかどうか、その進化にとってはきわめて重要なことになる。

これは個別の科学研究のプロセスのみならず、それら諸科学の概念枠組そのもの、つまりは世界理解のフレームワーク一般について論じる哲学の思考そのものについてこそいわれねばならないことである。哲学の思考においてこそ、そう、⑥ しゅりよう 民族が数キロメートル離れた地点での自然環境の微細な変化に的確に感応することおなじような仕方、同時代の社会の、微細だけれども根底的な変化を感知するセンスをもつということがきわめて重要である。そしてそうした感受性の作法は、なによりもまず、内的な必然的論理を⑦ 緻密 にたどるという要請に忠実であるとおなじだけ、他なるものとの接触によって非決定的に生成する事象に忠実であろうとする。「観念は生き物であって、鮮度を失わずに俎まなこの上にのせるにはある職人的熟練を要する」という、\*中井久夫の言葉が、それをなにより雄弁に語っていた。

(鷺田清一『哲学の使い方』一部改変)

(註) \*中井久夫 精神病理学を専門とする医者。

設問一  内①～⑦の平仮名(ひらがな)は漢字に、漢字は平仮名(ひらがな)に書き換えなさい。

設問二 A C には、どんな接続詞(つなぎことば)が入るか。次の中から最も適当と思われる語をそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア さらに イ 要するに ウ では エ もしも オ しかし

設問三 右に傍線部のある語句(1)「創造」、(2)「具体的」の反対の意味を表す二字の熟語(対義語)として最も適当と思われるものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) ア 模倣 イ 経験 ウ 想像 エ 独創 オ 発明  
(2) ア 画的 イ 意図的 ウ 抽象的 エ 内向的 オ 受動的

設問四 右に傍線部のある語句(3)「要請」と熟語の構成が同じものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 市立 イ 読書 ウ 花束 エ 進退 オ 救助

設問五 右に傍線部のある語句(a)「フレームワーク」とは具体的には何を指すか。本文中から七字で書き抜きなさい。

設問六 右に傍線部のある語句(b)「哲学のセンス」とはどのようなことか。本文中の語句を用いて四十字以内で説明しなさい。

設問七 I には、どんな語句が入るか。本文中から五字で書き抜きなさい。

設問八 II には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 知識 イ 観察力 ウ 感受性 エ 審美眼 オ 好奇心

問題二 次の文章を読んで、設問に答えよ。

(これまでのあらすじ) \*くったくした気持で沼池のほとりを散歩していたわたしは、一羽のがんが傷つき苦しんでいるのを見つけた。わたしがこの鳥を両手に拾いあげると、その羽毛や体の温かみが両手に伝わり、意外に重たい目方は、思い屈した心を慰めてくれた。わたしはこの鳥を丈夫にしてやろうと決心して家へ持って帰り、傷を治療した。

がんの傷がすっかり直ると、わたしはこの鳥の両方の翼を羽だけ短く切って、家で放し飼いにすることにしました。これは馴れると非常に人なつこい鳥でした。わたしが外出するときには門の出口までわたしのあとをつけて来るのです。夜ふけになると家のぐるりを歩きまわり、あたかも飼犬がその飼主に仕えるのと少しも変わりませんでした。わたしはこの鳥にサワンという名前をつけ、野道や沼池への散歩に連れて行きました。

「サワン！ サワン！」

サワンは眠そうな足どりでわたしのあとについてきます。

沼池は、すでに初夏の① **よそお** いをしていました。その岸にはわたしの背たけとほとんど同じ高さに細い茎の青草が茂り、水面には多くの水草の広い葉や純白の花が成育していました。サワンは **A** この沼池を好んだらしいのです。かれは水にすべりこむと、短い翼で羽ばたきたり尾を振ったりして、かれがこの水浴に飽きてしまわなければ、わたしが **B** 呼んでも水から上がって来ませんでした。そういうとき、わたしは草むらに寝ころんで常にわたし自身の考えにふけるのがならわしでした。なるほど、わたしはサワンの水浴を見守るために沼池へ出かけたのではなく、わたしのくったくした思想を追いはらうために散歩に出かけたのです。

サワンは水面に浮ぶことを好んだばかりでなく、水にもぐることを好みました。時としては何分間も水中にひそんでいることさえありました。しかし、がんとという鳥は、もともと昼間の光線や太陽熱を好まないもののようにしました。わたしがサワンを\*うつちゃっておくときには、かれは終日、② **廊下** の下にうずくまって昼寝ばかりするならわしでした。そして夜になると(わたしは庭の木戸を閉じてかれが逃亡しないしかけにしておいたのですが)サワンは垣根を破ろうとしたり木戸を飛び越えようとしていたりして、なかなか元氣さかんでした。

やがて夏が過ぎ、秋になって、ある日のことでした。それは夜ふけて降りだした激しい雨があがったあとでした。わたしは寝巻の上にとてらを羽織って、その日の午後にせんとくしてかわききらなかった足袋をよくかわかそうとして、火ばちの炭火であぶっているとありました。こんな場合にはだれしも自分自身だけの考えにふけったり、ふところ手をしたりして、あすの朝は早く起きてやろうなどと考えがちなものです。そうして炭火であぶっているたびが焦げくさくなっているのに気がつかないことさえあります。そのときわたしは、サワンのかんだかい鳴き声を聞きました。その鳴き声は夜ふけの静けさをもものしい騒がしさに転じさせ、たしかに戸外では何かサワンの神経を③ **こうふん** させる事件が起っているのだと気がつきました。

わたしは窓を開いて見ました。

「サワン！ 大きな声で鳴くな」

けれどサワンの④ **悲鳴** はやみませんでした。窓の外の本立は **C** こずえにそれぞれ雨滴のため、もしも幹に手を触れると幾百もの露が一時に降りそそいだでありましょう。けれど、すでによく暗れわたった月夜でありました。

わたしは外に出て見ました。するとサワンは屋根のむねに出て、その長い首を空に高くさし伸べて、かれとしてはできるかぎり大きな声で鳴いていたのです。かれが首をさし伸ばしている方角の空には、夜ふけになって上る月

のならわしとして、赤くよごれたいびつな月が出ていました。そうして、月の左手から右手の方向にむかって、夜空に高く三羽のがんが飛んでいるところでした。わたしは気がつきました。この三羽のがんとサワンは、空の高いところと屋根の上で、互いに声に力をこめて鳴きかわしていたのです。サワンがたとえば声を三つに切って鳴くと、三羽のがんのいずれかが声を三つに切って鳴き、かれらは何かを話しあっていたのに違いありません。察するところサワンは三羽の僚友たちにむかって、

I

と叫んでいたのであります。

わたしはサワンが逃げ出すのを心配して、かれの鳴き声にことばをさしはさみました。

(a)「サワン！ 屋根から降りてこい！」

サワンの態度はいつもとちがいがい、かれはわたしの言いつけを無視して三羽のがんに鳴きすぎるばかりです。わたしは口笛を吹いて呼んでみたり両手で手招きしたりしていましたが、

D

たまらなくなって、棒ざれで庭木の枝をたたいてどならなければならなくなりました。

「サワン！ おまえはそんな高いところへ登って、危険だよ。早く降りてこい。こら、おまえどうしても降りてこないのか！」

けれどサワンは、三羽の僚友たちの姿と鳴き声があったく消え去ってしまうまで、屋根の頂上から降りようとはしなかったのです。もしこのときのサワンのありさまをながめた人があったならば、おそらく次のような場面を心に描くことができるでしょう——遠い離れ島に漂流した老人の哲学者が、十年ぶりによくやうやく沖を通りすがった船を見つけたときの⑤ **ありさま**——を人々は屋根の上のサワンの姿に見ることができたでしょう。

サワンがふたたび屋根などに飛び上がらないようにするためには、かれの足をひもで結んで、ひもの一端を柱にくくりつけておかなければならないはずでした。けれどわたしはそういう手荒なことを⑥ **えんりよ**しました。かれに對するわたしの愛着を裏切って、かれが遠いところに逃げ去ろうとはまるで信じられなかったからです。わたしはかれの翼の羽を、それ以上に短くすれば傷つくほど短く切っていたのです。あまりかれを苛酷かこくに取り扱うことをわたしは好みませんでした。

ただわたしは翌日になってから、サワンをしっかりとつけただけでした。

(c)「サワン！ おまえ、逃げたりなんかしないだろうな。そんな薄情なこととはよしてくれ！」

わたしはサワンに、かれが三日かかっても食べきれないほど多量のえさを与えました。

サワンは、屋根に登って必ずかんだかい声で鳴く⑦ **習慣**を覚えました。それは月の明かるい夜にかぎり、そして夜ふけにかぎられていました。そういうとき、わたしは机にひじをついたまま、または夜ふけの寝床の中で、サワンの鳴き声に答えるところの夜空を行くがんの声に耳を傾けるのであります。その声というのは、よほど注意しなければ聞くことができないほど、そんなにかすかながんの遠音です。それは聞きよ(2)うによつては、夜ふけそれ自体が孤独のためにうち負かされてもらす歎息たそぎかとも思われ、もしそうだとすればサワンは夜ふけの歎息と話をしていたわけでありましょう。

(井伏鱒二『屋根の上のサワン』)

(註) \*くったく 思い悩んだり、疲れて嫌になつたりする気持ち。屈託。

\*うっちゃって 放り出して。

設問一

内①～⑦の平仮名(ひらがな)は漢字に、漢字は平仮名(ひらがな)に書き換えなさい。

設問二 

A	D
---	---

 には、どんなことが入るか。次の中から最も適当と思われるものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア ついに    イ どうやら    ウ いくら    エ しばしば    オ まだ

設問三 右に傍線部のある語句(1)と、「白」という漢字が同じ意味を表すものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 明白    イ 白状    ウ 白紙    エ 紅白    オ 潔白

設問四 右に傍線部のある語句(2)「夜ふけそれ自体が孤独のためにうち負かされてもらす歎息」に使われている修辞法として最も適当と思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 擬人法    イ 明喩法    ウ 擬態法    エ 反語法    オ 倒置法

設問五 

I
---

 には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア わたしをいっしょに連れて行ってくれ  
イ わたしのなわばりに入ってくるな  
ウ わたしはもう飛ぶことができないのだ  
エ そちらは鉄砲うちがいて危険だよ  
オ ここでいっしょに暮らさないか

設問六 右に傍線部のある語句(a)について、「わたし」はなぜ「サワン！ 屋根から降りてこい！」とことばをさしはさんだのか。次の中から最も適当と思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア サワンがかんだかい鳴き声を出したことを、近所迷惑なことだと腹立たしく思っているから。  
イ サワンが野生に目覚めたことを知って狼狽し、サワンが逃げ出さないと心配しているから。  
ウ 足袋が焦げくさくなっているのに気がつかなかったことを気恥ずかしく思っているから。  
エ 飛ぶことのできないサワンが屋根から落ちてまた傷つくことを恐れているから。  
オ 晴れ渡った月夜の美しさを邪魔するサワンのかんだかい鳴き声を耳障りに思っているから。

設問七 右に傍線部のある語句(b)について、いつもの「サワンの態度」はどのようなものであったか。本文中から三十文字以内で書き抜きなさい。

設問八 右に傍線部のある語句(c)「サワン！ おまえ、逃げたりなんかしないだろうな。そんな薄情なことはよしてくれ」に込められた「わたし」の気持ちとして最も適当と思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 昨晚、屋根から降りてこないサワンを激しく叱ったことを後悔する気持ち。  
イ 自然に帰ろうとするサワンのことをもはや認めざるを得ないという気持ち。  
ウ サワンがいつか去っていくという予感がどんどん膨らむ中、逃げないでくれと懇願する気持ち。  
エ サワンもわたしに対して愛着を抱いているに違いないと確信する気持ち。  
オ 逃げ出すことばかりを考えていて、傷を直してやったわたしの恩に報いる気のないサワンに失望する気持ち。







